時間・空間認識を育てる授業づくり
～ SDG sの視点で世界の諸地域を探究する～

福田　仁
鳥取大学附属中学校 社会科
E-mail: fukutaht@tottori-u.ac.jp

Fukuta Hitoshi（Tottori University Junior High School）: **Class making to bring up recognition of time and space perception － Inquire into the world from the perspective of the SDGs**

要旨 ― 新学習指導要領に示されている「社会的な見方・考え方を働かせた思考力・判断力・表現力を育成」にむけて，時間・空間認識を育てる授業実践を行った。世界の諸地域での学習で ESD，SDG sの視点を取り入れた授業実践を報告する。

キーワード ― 時間・空間認識，持続可能な開発のための教育，SDGs

Abstract ― For the purpose of “fostering thinking, judgment and expression skills using social perspectives and ways of thinking” indicated in the New Course of Study, I had making to bring up recognition of time and space perception. I report on teaching practices that incorporate the perspectives of the SDGs in learning around the world

Key words ― recognition of time and space perception, education for sustainable development, SDGs

1. はじめに

平成 29 年に告示された中学校学習指導要領において，社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追及したり解決したりする活動を通して，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を育成することが社会科の目標として掲げられている。中学校社会科の地理的分野では，社会的事象を位置や空間的な広がりに着目して捉え，地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で，人間の営みと関連付けて，働かせるものとされている。そして，世界の諸地域学習における地球的課題の視点が導入され，持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度など，国家及び社会の形成者として必要な資質・能力を育んで求められている（文部科学省 2018）。

本年度は地理的分野の世界の諸地域の学習において，時間・空間認識を育てる探究的な学習を取り入れた授業実践を行うこととした。そこで，持続可能な開発のための教育の視点に立った学習指導を進め，教材（学習課題，学習内容）を時間的・空間的につなげることに重点を置く。そして，課題の探究・解決の過程で持続可能な社会づくりに関する課題を見つけ，それらを解決するための必要な能力や態度を身に付けることをねらいとする。

2. 時間・空間認識を育てる学習

米田豊（2019）は，時間・空間認識を育てる探究的な授業の前提として，生徒自身が探究することができるキーワードとして，「学習課題」，「内容知と方法知の習得」，「カリキュラムデザイン」の 3 つを挙げている。中でも，「内容知と方法知の習得」については，「生きて働く知識」を内容知，「内容知の活用方法」を方法知の習得が必須であり，この要求に応えることができる授業が探究的な授業であるとしている。そのため，学習課題生徒自身が学習課題を設定したり，解決したい学習課題を発見したりすることが大切であると考える。そして，その解決に向けて思考方法を生徒自身が習得できる授業展開を構築することがポイントとなる。このような授業展開を行うことで，社会的な見方・考え方を習得させ，主体的に学習課題を解決する意欲や学習したことを実生活に生かそうと

する態度が育まれることにつながると考えている。

地理的分野の学習では，地域の過去や現在を比較することを通して，社会事象へ変化をとらえることができる。社会の変化が激しい現代において今の状況からこれからどう変化し，持続可能な社会をつくるにはどうしたらよいか考えることができる。

また，地形や気候などの自然環境の特色をとらえたり，地域による違いを見つけたりすることで空間的な広がりを認識できる。社会的な事象を時間・空間的な認識を持って，学習を進めていくことで，生徒に時間・空間認識を育てることができると考える。

3. 持続可能な開発のための教育とSDGs

持続可能な開発のための教育（以下，ESD）とは，人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう，気候変動，生物多様性の喪失，資源の枯渇，貧困の拡大等，人類の開発活動に起因する現代社会における様々な問題を，各人が自らの問題として主体的に捉え，身近なところから取り組むことで，それらの問題解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらし，持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である（日本ユネスコ委員会 2018）。関連するさまざまな分野を持続可能な社会の構築の観点からつなげ，総合的に取り組むことが必要とされている（**図 1** 参照）。

図 1. ESDの概念図
（文部科学省（日本ユネスコ国内委員会）(2018) ユネスコスクールで目指す SDG s持続可能な開発のための教育より）

ESDは持続可能な社会をつくりあげるために行動できる人材の育成をねらいとしていることから，中学校社会科の目標である，広い視野に立ち，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の育成に重要な役割を示すと考える。

ESDで目指すこととして，持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な 7 つの能力・態度が **表 1** のように示されている（国立教育政策研究所 2012）。

表 1 持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な 7 つの能力・態度

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）
①批判的に考える力
②未来像を予測して計画を立てる力
③多面的・総合的に考える力
④コミュニケーションを行う力
⑤他社と協力する力
⑥つながりを尊重する態度
⑦進んで参加する態度

図 2. 持続可能な世界を実現するための 17 のゴール（国際連合広報センターHPより）

SDGsは，2001 年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として，2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された 2016 年から 2030 年までの国際目標である。持続可能な世界を実現するための 17 のゴール（**図 2**）・169 のターゲットから構成されている（外務省 2017）。

教育はSDGsの目標 4 に位置付けられ，ESDは目標 4 の中のターゲット 4.7 に記載されている。「教育が全てのSDGsの基礎であり，全てのSDGsが教育に期待」している」とも言われている。ESDは持続可能な社会の担い手づくりを通じて，17 のゴール全ての達成に貢献するものとされている。SDGsが掲げる17のゴールを学習に取り入れ，授業実践を行う。

4. 授業実践

①世界の諸地域の指導計画

地理的分野の「世界の諸地域」の学習に入る前に，SDGsについて理解を深める時間を設定した。世界の諸地域の学習において，諸地域の課題に対して，SDGsの17ゴールを考える視点として，持続可能な社会づくりを考えていくことを想起させることをねらいとした。

各州の取り扱い時間数は以下に示すとおりで，各州の指導過程は，原則，自然環境→歴史・文化→産業の順で学習を進めた。ただし，アジア州は広範囲に広がっているために，自然環境→歴史・文化を学習した後は，地域ごとで学習を進めた。

第 1 次　SDGsについて（全 1 時間）
第 2 次　アジア州（全 7 時間）
第 3 次　ヨーロッパ州（全 5 時間）
第 4 次　アフリカ州（全 4 時間）
第 5 次　北アメリカ州（全 5 時間）
第 6 次　南アメリカ州（全 4 時間）
第 7 次　オセアニア州（全 4 時間）

②アジア州の単元構成（全 7 時間）

	学習テーマ
第 1 時	アジア州の自然環境
第 2 時	共生社会の在り方
第 3・4 時	中国の経済
第 5 時	東南アジアと私たちの生活
第 6 時	インドの発展
第 7 時	西アジア・中央アジアの発展

③第 5 時の授業について

アジア州の第 5 時は東南アジアと私たちの生活の結びつきをテーマに学習を進めた（**表 2**）。インドネシア・マレーシアでのパーム油の生産に関わる問題を取り上げた。

表 2 授業の内容

導入	1. パーム油について知る。
展開	2. パーム油の生産の様子やその影響について知る。 3. 持続可能なパーム油の生産・利用について考える。
まとめ	4. サスティナブルラベルを確認する。

パーム油は，インドネシア・マレーシアで世界の 85%を生産している。クッキーやお菓子など食品に利用されるだけでなく，洗剤などにも利用されている。食品などのラベルには，植物油脂と記載されていることが多く，実際何が。使用されているかはわかりにくい部分がある。私たちの生活の中にもこのパーム油が使われている食品や製品を使用している可能性があることを伝えた。これは，インドネシアやマレーシアで起こっていることが，日本に暮らす私たちにとって無縁のことではなく，自分たちの生活に大きく関わっていることを示し，学習課題を自分ごととして，考えさせることをねらった。

そして，インドネシア・マレーシアでのパーム油の生産によって，熱帯林が減少していることを確認した。この熱帯林の減少が，生物多様性の消失や気候変動などに大きな影響を与えている。さらには，違法な森林伐採が行われている現状もあることを確認した。自分たちが食べている食品や製品の利用と熱帯林の破壊を結び付けていた。

このままの状況でパーム油を生産していたら，人々の生活は持続不可能になってしまい，パーム油を使用できなくなってしまう。そこで，どうしたらパーム油の生産と利用が持続可能なものになるかを課題として提示し，アイディアを出し合った。生産側と利用側（消費側）を明示することで，1 方向からの見方・考え方ではなく，多面的に考えることをねらった。

生徒の思考としては，生産側で考えることが多かった。これは，今までの工業や農業の学習では，生産側に視点が置かれ，学習が行われていることが考えられる。また，パーム油の使用を禁止するなどのような考えも見られた。

そして，みんなの意見を出し合い，共有した後に，サスティナブルラベルを紹介した。SDGsの 17 ゴールの「12 のつくる責任　使う責任」にあてはまる。こ

のようなラベルがついている商品を選択することで，地球規模の課題に対して行動することにつながることを確認した。また，このサスティナブルラベルはパーム油だけではなく，カカオ豆やコーヒー豆についてのものもあり，アフリカ州での学習にもつながりを持たせることができたと思う。

5. まとめ

本年度はSDGsの視点を取り入れ，授業実践を積み重ねてきた。その中で，課題に対して，SDGsの 17 のゴールが考える視点となり，多角的な思考を生み出せたのではないとか考えている。また，日本以外の課題に対して，世界の諸地域と自分を結び付けて，自分ごととして考える姿が多く見られるようになったと感じる。そして，何よりも試行する際の視点が明確になったことで，既習事項を使ったり，他地域と比較したりするなど，やりくりして考察することができていたのではないかと思う。

ただ，その思考を深めるところまでは十分にできなかった。思考ツールなどを活用して，思考を広げたり，深めたりすることが今後の課題である。また，授業の流れが現状把握をし，その現状の中にある課題を考えるという流れが多かった。そのため，いろいろな要素が複雑に絡み合う課題の設定になっておらず，多様な考えを引き出すことを教師の側が制限をしていた部分があったのではないかと考える。

今年度の授業実践での成果と課題を生かしながら，来年度は歴史的分野での授業実践も積み重ねていきたい。

文献

外務省（2017）持続可能な開発のための 2030 アジェンダと日本の取り組み．7p

国立教育政策研究所（2012）学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究最終報告書．354pp

米田豊（2019）意図的に時間軸と空間軸を組み込んだ社会科授業．社会科教育．4-7pp

文部科学省（2018）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編．7-23pp

文部科学省（日本ユネスコ国内委員会）（2018）ユネスコスクールで目指す SDG s持続可能な開発のための教育．47pp